

俗物凶鑑





筒井康隆全集 12

俗物図鑑

新潮社

ずくぶつずかん
俗物図鑑



筒井康隆全集 第12巻

昭和五十九年三月二十日 印刷
昭和五十九年三月二十五日 発行

定価一五〇〇円

著者 筒井 康隆

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一(〒一六二)

電話 業務部 東京(〇三)二六六・五一一
編集部 東京(〇三)二六六・五四二

振替 東京 四一八〇八番

印刷 大日本印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小
社通信係宛御送付下さい。送料小
社負担にてお取替えます。

© Yasutaka Tsutsui 1984 Printed in Japan

ISBN4-10-644412-7 C0393

筒井康隆全集第十二卷・目次

長 篇

俗 物 図 鑑

7

エッセイ

恰好よければ……………319

星 新 一 論……………320

発作的あとがき……………324

機械・涙・報道……………325

鮎 ち ゃ ん 論……………332

神 戸 に 帰 る……………335

華麗なる情事……………337

射 撃……………338

私のチャーム・ポイント……………339

過去——現在——未来……………340

散歩みち……………342

東京↓神戸引越し騒動……………343

わが“迷惑料”闘争……………348

星新一のサービス酒……………350

最後の会話……………351

解 説

岡 庭 昇……………353

俗
物
圖
鑑

装
幀

山
藤
章
二

長篇俗物図鑑

お歳暮会議

「また今年も、ジョニー赤とジョニー黒ですか。もつと何か、変ったお歳暮にしたらどうでしょう」営業庶務の平松礼子が首をかしげてそういった。「毎年同じお歳暮じゃ、お得意先だって、またかとお思ひになりますわ」

営業第二課長の雷門享介は、眼を細めて礼子の顔を眺めた。(美人だし、頭もいい。特に無愛想というわけでもない。それなのにどうして婚期を逸したのかな。大学を出てすぐ入社してきたのが五年前だ。するともう二十七歳になつてゐる筈だが)

咳ばらいをし、享介はいった。「何か変ったお歳暮と簡単にいうが、君にその心あたりがあるのかね。変ったお歳暮というのは、君が想像している以上にむずかしいんだ。

むずかしいからこそ、どこの会社でもお歳暮といえは、馬鹿のひとつおぼえみたいに味の素とサントリーだ。お中元の時にはこれにカルピスが加わる。そして部課長級にはジョニー・ウオーカー。それ以外の変ったお歳暮というのは滅多にない。なぜだと思ふ」

「さあ」礼子は、ソファの上で少しもじもじした。

そのソファは、尻を据えると床へめり込みそうになるくらい柔らかく、しかも奥行きがあつた。だから礼子が身動きするたびに享介は、彼女の膝のあたりから眼をそむけなければならなかつた。享介は礼子の真正面に腰かけているため、彼の眼は彼女の腰と膝小僧を結ぶ、三十五度ほど勾配のついた直線の延長上にある。

(これはいかん)と、享介は思つた。(太腿の白さが眼について話ができん。もうひとつ悪いことに、彼女はどうかやうにおれが困つてゐることに気がついていない。さらに悪いことに、あの短かすぎるスカートは彼女の足の長さのため今も尚まくれつつある。いちばん悪いことには、おれが欲情してきた)

享介と礼子は第二応接室で二人きりだつた。会議室が部長会議のためふさがつていたので、しかたなくこの応接室で「お歳暮会議」をはじめたのである。

風巻機工のお歳暮会議は、毎年お歳暮の時期が近づくと、営業部と営業庶務の間で行われることになつてゐる。営業部から出席するのはいつも雷門享介である。これは享介が得意先全部の状態を最もよく把握しているからである。営業庶務からの出席者は毎年違ふが、今年は平松礼子がお歳暮の購入を担当することになったのだ。

「変ったお歳暮を見つけるのがなぜむずかしいか、その理

由を説明しよう」享介はあらぬ方向に眼を向けて喋った。

「まず品物を見つけるのがむずかしい。たとえばデパートの特選品コーナーへ行き、お歳暮にふさわしい品物を選ばなければならない」

「あら。それでしたらわたしが行きますわ。わたし、買物は上手なんです」礼子は身をのり出した。膝小僧が、はねあがった。

（せめて足を組めばいいのに）享介は眼をしばたき、また咳ばらいをした。「まあ待ちなさい。買物が上手というだけではだめだ。なぜ特選品コーナーへ行かなければならないか。それはその品物が同種類の品物のうちで最も高価なものでなければならぬからだ。たとえば二万円の品物を贈ったとすれば、その種類のもので二万円以上のものは絶対にあつてはならないのだ」

「わたし、そういうものを見つけるのが上手なんです。そういう買物って大好きですわ」また、身をのり出した。

（丸見えだ。注意してやろうか。こういう時、女に恥をかかせないで注意できる、何かうまいジョークはないものか）そんなジョークは見つからなかった。どんな言いかたをしても下品になる。

享介はのどをからからにして喋り続けた。「まだある。変った品物ばかりをあちこちへ贈った場合、その品物は珍しがられて、風巻機工からのお歳暮が得意先の間で話題に

なるおそれがある。これが実に、具合が悪い。誰だって、他の者が自分よりも高価なものを貰ったと知つたらいい気はしない。たとえそれが上司であつてもだ。しかしこつちとしては、相手によつて差をつけざるを得んわけだ。すると風巻機工はけしからんということになって逆効果だ。そうじゃないかね」享介は声がうわずつてきたためにあわてて話を中断した。

礼子が椅子の背に凭れかかり、天井を睨みつけて何ごとかを考えはじめたため、彼女の膝が、さらに数センチはねあがったのである。

（この娘、おれを誘惑しようとしてるんだらうか）享介は一瞬、そう思った。だが、そうでないことはすぐにわかった。

礼子が指をばちんと鳴らした。「じゃあ、数量によつて差をつければいいでしょう。たとえば係長級には銀のスプーン半ダースのセット、課長級には同じもの一ダースのセットという具合に」

「それも具合が悪い」享介は即座にかぶりを振つた。「その係長が上司である課長のところへ、風巻機工からのお歳暮をたらいまわしにすることが考えられる。さらに課長が上司の誰かへたらいまわしにする。するとそれが変つたお歳暮であればあるほど、風巻機工が誰にどの程度のおものを贈っているか、全部ばれてしまう」

「グラフを作ればいいわ」と、礼子がいった。「誰が誰のところへお歳暮をたらいまわしにしようか、あらゆる可能性を考えて、お得意先の相関関係をグラフにするの。それによって品物を何種類かにわければ、たらいまわしにされてもばれないようにできるわ」

「芸能界相姦図じゃあるまいし」享介は、ややあきれて礼子の顔を眺めた。「そんなややこしいものを拵しらえている暇はないよ、君」

「いいえ。コンピュータを使えば簡単にできるわ」むきになっていった。「お得意先のかた、ひとりひとりのことは調査済みよ。すべてパンチ・カードになっていますわ。あとはそれぞれの関係だけをグラフにするよう、コンピュータにかければいいんです。コンピュータ室の人に頼んで、コボルにでもフォートランにでもプログラミングしてもらいます」

「ところが、それではどうしても、まずいんだよ」享介はハンカチで汗を拭ぬぐった。

「あら課長。ご気分がお悪いんですか」礼子は兎のように丸い眼をぱくりさせて享介を見つめた。「お声も、枯れてますわ」

「氣を悪くしないで貰いたいのだが」享介はしかたなく礼子にいった。「君、わたしの隣りへ席を変えてくれないか」「あら」礼子はすぐに氣がつき、あわててスカートの裾を

引っぱった。「ごめんなさい。うっかりしてましたわ」

「別にあやまることはない。なまじこっちに変な氣があるから、眼のやり場に困るんだ」かぶりを振った。「ああ、駄目だだめだ。いくらスカートをのばしたって、それはミニスカートだから、どっちみち膝が出る。やっぱりこっちへ移動してくれ」

「じゃ、そうしますわ」礼子はくすくす笑いながら立ち、享介の隣りへ移った。「意外だよ」

「何がだい」

「課長はミニスカートの女なんて見馴れてらっしゃるだろうと思つてました。多少足が見えたって氣になさらないだろうと思つて、こっちは安心しきっていましたのに」

「そんな馬鹿な」享介も乾いた声で笑つた。「ぼくだつて男性だし、まだ四十歳を過ぎたばかりだ。そりゃあ君の言うように、おれは接待で毎晩のようにバーやクラブへ行くから、ミニの女性は見馴れている。しかし、そういうのと、こういう場合とはやっぱり違う」

（どう違うんだろうな）享介は考えた。（昼間、B Gのミニを見た方がずっと色っぽく感じるというのはおれだけだろうか。そういえば人社当時、おれは事務服姿のB Gを会社の応接室のソファで犯すという夢を持っていたな。ながいこと忘れていたが、今ごろ思い出したぞ。考えてみりゃ、会社一の美人B Gとひとつソファに並んで腰をおろしてい

る現在の状態は、その夢を実現する絶好のチャンスではないか。

もちろん本気でそんなことができる筈はなかったが、享介は自分の考えたことでいささか興奮した。ながい間味わったことのない感情の昂揚だった。

「面白いわ」礼子が、くすりと笑った。

「な、な、何が面白い」考えを読まれたように感じて、享介はどぎまぎした。

「面白いっていうより、安心したっていった方がいいかしら」礼子が首を享介の方へねじまげた。彼女の恰好のいい鼻さきが享介の眼の下にあった。「わたし前から課長に興味持っていましたの。ほんとに、仕事にしか興味を持ってない人なんだろうかって。もしそうだとすると、課長に認めてもらうためには仕事の上で認めてもらうしかないわけですよ。さつきからむきになって課長に反論したのは、もしかすると課長に認めてもらいたかったからかもしれないわ。」

でも課長もやつぱり、そんなことで悩んだり困ったりする男性だつてことがわかって安心しましたわ」彼女はそこまで喋ってから急にあわてはじめた。「でも、さつきのは意図的にあの、その、露出したんじゃありませんわよ」

「わかつてるさ。もしそうだったとしたら、ぼくもそれほど困らなかっただろう」享介は苦笑した。「さて、お歳暮会議の続きだ」

「はい」

（若い娘の、中年男に対する好奇心だ。よくあるやつだ。それだけのことだ）享介はそう思いこもうとした。「さて、どこまで喋ったかね」

「変ったお歳暮は、どうしても具合が悪いところまででしたわ」

「そうなんだ。いくらこちらが苦心して、珍しいものを贈ったところで、先方様に喜んでもらえなければしかたがない。このお歳暮ってやつは家庭へ届く。だから奥様がたにも喜んでもらわなければならない」

「あら。それでしたらジョニー赤やジョニー黒を喜ばない奥様だつて、たくさんいらつしゃるんじゃないかしら。旦那様が酒癖悪くて、飲めば暴れるからというので家にはお酒を置いとかないっていう奥さん、わたし知ってますのよ」

「ところが、そうじゃない。君は知らないらしいね。今や部課長級の奥様がたの間では、ジョニー赤が五千円、ジョニー黒が一万円の、いわば金券として通用してること」

「まあ、初耳だわ」

「デパートへ持って行けば、すぐその値段で引きとって貰えるんだよ。お歳暮がたくさん送られてくる家なんか、ほっとけばジョニー黒が二十本も三十本もたまつてしまう。」

こういうのは金と引換えるより他にないわけだ。だから最初に言ったように、ジョニー赤、ジョニー黒ほど皆から喜ばれ、しかも無難なものはないわけだ。わかったかい」享介はにやりとして礼子に横眼を使った。

「そんな裏があるとは知らなかったわ」礼子は溜息をついた。「でも、なんとなく殺伐ですわね。それでいいのかしら」

「それでいいのさ」(たしかに殺伐だ) そう思いながらも享介は断言した。「それでいいのさ」(このせちがらい世の中で、しめった関係を押しつけられるのは誰だって迷惑にちがいない)「しかし」と、享介はいった。「どうしても君のやりかたでやってみたいと思うのなら、ぼくは強いて反対しないよ。ぼくだって、ドライなものにあこがれているわけじゃないからね」

「あら。もうそろそろ退社時間ですわ」礼子が享介の腕時計を見て声をあげた。「急ぎましょ。わたしだって、ひとりよがりなウェットはきらいよ」

「では、ひとりひとり、得意先の名前を読みあげてくれ。順に決めていこう」

「はい。では、ガンマ・ジーゼルの資料課長」

享介は腕組みし、眼を閉じた。「ジョニー黒二本」

「同じく購買第一係長」

「ジョニー黒二本」

「同じく購買第二係長」

「ジョニー黒二本」

「ぜんぶ、ジョニー黒二本ですか」怪訝(けげん)そうに、礼子が享介の表情をうかがった。

「そうだ」享介はうなずいた。「それから、今年の異動で購買係長から総務へ変った安達さんには、ジョニー黒一本」

「あのう」礼子もじもじした。「今まで、ガンマ・ジーゼルの総務部には、誰にもお歳暮を出していないんですけど。それに安達さんはたしか、左遷(させん)だとかがいました」「安達さんには、今までさんざ世話になったからな」享介は弁解するようにいった。「左遷されたからといって、急に知らん顔はできないよ。露骨すぎる」

「でも、そこにこそドライさが必要なんじゃありません」礼子は意地悪(いぢあく)そうな笑いを浮べ、わざとねちっこく言った。「あの人は、いい人なんだ」享介はうめくようにつぶやいた。

「課長って、いい人なのね」礼子は享介の顔をのぞきこんだ。「やさしいのね。お得意先の人たちに尽すんですってね。だから、お得意先の人たちからすごく信頼(しんらい)されてるんですってね。みんな知ってるわ。お得意先の接待は、課長でなきゃ、だめなんですってね。課長が行きさえすれば必ず注文(ちゅうもん)がとれるんですってね。社内ですれ知らない人は

いないわよ。やっぱり仕事一点ばりじゃだめなわけなのね。お人柄なのね」

「今度はぼくを照れさせようってわけか」享介は肩をそびやかせた。「しかし、ついでいうなら、社内ではぼくのことを営業課長とは呼ばない。接待課長と呼んでいる」

「だけどそれは悪口じゃないわ。接待役のむずかしさぐらい、皆、知ってるわよ」

（知るもんか）享介は思った。（ただ酒を飲めていい身分だぐらいに思っているんだ）

「でも、この調子でいけば、今年のお歳暮は予算をだいぶオーバーしますわ。毎年、オーバーする一方ですわ」礼子が眉をしかめた。

「年ごとにお歳暮の金額がふえるのはあたり前だ」享介は少し不機嫌になった。「それなのに予算は去年と同じ。こんな馬鹿なことはない」

毎年この会議で採めるのは予算のことだった。

「ほんととは購買第一係長にはジョニー黒三本を贈りたいところだ。でも、その人は新任だから二本にしたんだ。資材課長だつてそうだ」

礼子は吐息とともに肩を落した。「困ったわ」

「君を困らせるつもりはない」礼子の肩を叩いた。彼女の肩は柔らかかった。「しかも、君が思っているほどぼくはウェットじゃない。せいぜいドライにやっているつもりな

んだ。説明しよう。いったん左遷されたり、他の部署へやられた人が、もとの係りになって舞い戻ってくる場合がしばしばある。安達さんの場合も、おそらくそうだとぼくは睨んでいる。それまでは絶縁したり、よそよそしくしてはだめだ。たとえランクを下げてでも贈りものは続けておくこれを『繋ぎ』という」

礼子は次第に眼を見ひらき、喋り続ける享介の横顔を眺め続けた。

「もうひとつ大事なことは、どこの会社にも派閥というものがある。これをしっかり把握しておかなければならない。重役の対立関係を知り、親分子分の関係を知らなければならぬ。さもなければ、いったん社長が交替した時に、それまでけんめいにサービスしていた各担当者が上から下まで芋蔓式に全部左遷され、尽したことがすべて無駄になるという可能性も出てくる。そうなると一からやり直しだ」

「課長はそういつたことすべてを、つかんでらっしゃるんですか」礼子が讃嘆の眼で享介を見た。

「そのつもりだ。自慢するわけじゃないが」享介は自嘲するように笑った。「そういう、つまらんことを知っておくのも、接待課長としての当然の務めだ」

「そういう課長つて、とてもすてき」礼子は熱っぽく享介を眺めた。

「おやおや。どういうわけだろうな。君にそういわれると、